

元構成員

## 「東京拘置所の寒い日」 山中 次郎

2000年2月、逮捕されて4年9か月が過ぎ去りました。私は今、東京拘置所の独房の中でこの手記を書いています。東拘の独房はとても寒い所です。

オウムでの6年間の出家生活を思い出しています。私はずっと富士、または阿蘇の教団施設で生活しておりました。オウムの施設は山の中腹にあるものですから、冬は寒いおもいをしたものです。でもあのころは、それに耐えることができました。目標があったからです。

「解脱・悟り」という自己の救済、「衆生済度」という他の救済。この目標が自分たちの活動により実現できると信じていました。オウムが、麻原が描き出した目標は、私の求めていたものとあまりにも合致していました。自己を高めたい、他のために何かをしたいと考える私は、あらがう術もなく、オウムに引きよせられていきました。

「人は何のために生きるのか？」

この問いに対する答えを与えられ、その実現に向かっていると信じていたわけですから、オウムでの生活は精神的に充実していました。私は夢中になって、与えられたワーク・修行をやり続けていたのです。

その目標が完全なまやかしであると分かったとき、私は東拘の独房で隔離される身となっていました。なぜ、こうなるまで気付けなかったのか……。そして私はオウム真理教を脱会したのです。出家から10年の月日が流れていました。

拘置所からは食事と睡眠は十分与えられている、と思います。少なくともオウムでの生活と比べると、ずっとマシです。おかげで体調もずいぶん良くなりました。

オウムでの生活はヒドかった。偏った少量の食事しか与えられませんでした。私のワークは肉体労働であり、また日々のストレスが高じて、いつも腹をすかせていました。それで毎日、その空腹感と戦わなければなりませんでした。休息も満足にとれなかった。危険な長時間の労働。それだけでなく、一生では終わらないくらい、大量の修行課題を与えられていたからです。いつも何かにせかされている感覚がありました。そのような状況では、冷静にものを考えることなどできませんでした。

以前の私は、あまりに偏狭な独善的見方にとらわれていたことに気付きました。「オウム以外に真理はない。現世は悪のみで、価値がない」といった見方が、その典型です。これは誤りでした。一般の人の中にも、修行をしていない人の中にも、すばらしい人物はたくさんおられます。私は社会の暗部ばかり

## 「東京拘置所の寒い日」 山中 次郎

見てしまっていることに気がきました。そして一般の人をすごくバカにしていたことに気付き、それを反省しています。これからは広い視野を持ち、柔軟な考え方を身につけたいと思っています。

カルトの教えは恐ろしいものです。人間として最も大事にしなければならないものを、いつの間にか失ってしまうからです。やさしい心、他を思いやる心、共感する心。こういった感情がさびついて、動かなくなってしまうのです。そのことを私は身をもって経験しました。そして二度とカルト集団に入りたいと強く思っています。壊されてしまった人間性をいかに復活させるかが、今の私の課題です。私は人間をやりにおさなければならないと感じているのです。

オウムでは、「上司の指示はグル麻原の指示」とされていました。指示に疑問をもつことは、グルに対する疑念を意味し、弟子として恥ずべきこととされていました。下手すると、拷問・私刑のような「極厳」修行に入れられかねません。また、指示に従わなければ、オウムにすることはできなくなります。そのことは生活の基礎をすべて失ってしまうだけでなく、修行ができなくなり地獄行きになってしまうと思ひ込んでいたのです。

このように、指示に逆らったり、説明を求めたりすることは困難な状況にあったわけですが、私はもっと勇気を持つべきだった、自尊心や良心を捨て去るべきではなかった。

最後になりました。私は第7サティアン・サリンプラントの配管、松本サリン事件の噴霧車改造作業を行ってしまった者です。この作業にあたっては、いつものごとく何の説明もなく、何に使われるかよくわからなかったとはいえ、上司の指示に無批判に従い、このような恐ろしいものを作ってしまった。

私のかかわった事件の被害者、そのご家族の方々に深くお詫びいたします。私が直接かかわらなかった事件についても、私のオウムでの活動がそれを容易ならしめたことは明らかである、と自覚しています。すべてのオウム事件で被害を受けられた方々に、たいへん申し訳なく思っております。私はこの罪を恐れず、自分が何をできるかを考え続けます。そしてそれを実行し、罪の償いをやり続けたいと思います。